

「七高僧①竜樹菩薩について」

今日は、前回に引き続いて七高僧のお話をしたいと思います。

七高僧のお一人目、竜樹菩薩は、お釈迦様が亡くなられてから 6～700 年後の紀元 2～3 世紀（西暦 150～250 年頃）に活躍したといわれます。

南インドのヴィダルバの出身で、インド名をナーガールジュナ (**Nāgārjuna**) といいます。

ナーガは「龍」もしくは「蛇」で、アルジュナというのは「力を獲得した人」という意味であり、またこれは昔の英雄の名前でもあり（『マハーバーラタ』の『バガヴァッド・ギーター』にはアルジュナという人物が登場し、クリシュナという神と対話する）、またアルジュナという樹があったという説もあります。

中国ではそれを音写して「樹」と書いたので、「竜樹」もしくは「龍樹」と書きます。

菩薩とは、如来や仏（覚者、目覚めた人）になるために修行しておられる方のことです。

竜樹菩薩は子供の頃から頭脳明晰で、ヴェーダ（古代インドのバラモン教の聖典）などの様々な学問を修得する天才少年だったようです。裕福なバラモンの家に生まれたといわれます。

バラモンとは古代インドの宗教的身分制度で最上位の階級です。

〈カースト（インドではヴァルナ＝四姓と呼ぶ）：①バラモン＝宗教者②クシャトリア＝王や貴族、武士③ヴァイシャ＝商人・平民④シュードラ＝奴隷〉

お釈迦さまは、仏教ではこうした身分制度を否定されました。

青年の頃、人生というのは自分の欲望を満足させて快樂に生きるのが最も楽しいことだと考えて、

三人の友達と相談して、^{おんしん}隠身の術、すなわち自分の身を隠してしまう術を大家から身につけます。

ある薬をまぶたに塗ると、身体が見えなくなるというのです。

隠身の術を身につけた四人は、ある日王宮に忍び込んで、宮中の美女にいたずらをします。

100 日あまりの間に宮中の女官の中に妊娠する人が出たので、その美女はそれを国王に申し出ます。驚いた国王は大臣を集めて相談し、仙術使いの仕業であることを確認します。

そこで細かい砂をすべての門の中にまき、もし仙術をたしなむ者であれば足跡が残るであろうと役人に見張らせたところ、四人の足跡を見つけます。

そこで王様は門を閉ざして兵隊を集め、宮中のいたるところで刀を振るわせたのです。

隠身の術を使った三人の友人は、その刀に当たってたちまち斬り殺されてしまいました。

ナーガールジュナは、刀の届かない王様の陰に隠れて、かろうじて助かります。

そしてその時、人生の苦しみや不幸の元は欲望であることを悟り、出家しようと誓うのです。

幸いにも逃げることができたナーガールジュナは深く反省し、生まれ変わったような善い人になり、山奥の仏塔を訪ねて受戒・出家し、上座部仏教の教義を学びました。

上座部仏教とは、タイやスリランカ、ミャンマーなどに伝わった南伝・上座部 (**テーラワーダ** = **Theravāda**) 仏教のことで、ヒーナヤーナ (**Hīnayāna**) = 小さい乗り物 (小乗) ともいいます。

釈迦の教えを忠実に実行し、涅槃（輪廻からの解脱）に到ることをめざします。

はじめは上座部仏教を学んでおられましたが、ヒマラヤの雪山に入って、あるひとりの年老いたお坊さんから大乘仏教の経典をさずかり、大乘仏教を本格的に学ばれるようになります。そして後に「大乘仏教最大の思想家」と呼ばれるもととなりました。（鳩摩羅什訳『龍樹菩薩伝』）

大乘仏教の「大乘」とは、サンスクリット語の「マハーヤーナ」(Mahāyāna) の訳で、「大きな、偉大な乗り物」という意味です。すべての人々を迷いの世界から悟りの世界に運ぶという意味で、大きな乗り物にたとえられます。大乘仏教は、自分の解脱よりも全ての人、他者を救うという利他の教えを主張し、菩薩の精神と行を説き、慈悲の心で教えを実践することが強調されました。

紀元前後からアフガニスタン・中央アジアを經由して中国・朝鮮・日本・ベトナム・チベット等に伝わったので、北伝仏教ともいわれます。

著書に『中論』『大智度論』などがあり、『十住毘婆沙論』の易行品、『十二礼』は真宗の七祖聖教です。

竜樹菩薩は「千部の論師」「八宗の祖」と呼ばれ、日本の仏教各宗派からあがめられています。

(八宗=俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴の奈良南都六宗と、平安時代の天台・真言の二宗)

『正信偈』3頁目上段1行目

「^{いんどさいてんしろんげ}印度西天之論家 ^{ちゅうかじちいきしこうそう}中夏日域之高僧 ^{けんだいしやうこうせしやうい}顕大聖興世正意 ^{みょうによらいほんぜいおうき}明如来本誓応機」

〈^{いんどさいてん}印度西天の論家、^{ちゅうか}中夏・^{じちいき}日域の高僧、^{だいしやう}大聖 ^{こうせ}興世の正意をあらわし、^{によらい}如来の本誓 ^き機に^{おう}応ずることをあかす。〉

《インドの菩薩方（^{りゅうじゆ}竜樹・^{てんじんほさつ}天親菩薩）や中国と日本の高僧方（^{どんらん}曇鸞・^{どうしやく}道綽・^{ぜんどう}善導・^{げんしん}源信・^{げんくう}源空）

が、お釈迦様（^{だいしやう}大聖）がこの世に出られた（興世）本当の目的（正意）をあらわし、阿弥陀仏の本願（^{ほんぜい}本誓）は、わたしたち（^{あき}機=人々の能力）のためにたてられたことを明らかにされました。》

親鸞聖人は七高僧によって、お釈迦さまがこの世に出られたのは阿弥陀仏の本願を説くためであり、その本願こそが私たちを救う法であることを明らかにされたのです。

「^{しやくかによらいりやうがせん}釈迦如来楞伽山 ^{いしゆうごうみょうなんてんじく}為衆告命南天竺 ^{りゅうじゆだいじしゆつとせ}竜樹大士出於世 ^{しつのおうざいはうむけん}悉能摧破有無見」

〈^{しやくかによらい}釈迦如来 ^{りやうがせん}楞伽山にして、^{しゆう}衆のために^{ごうみょう}告命したまわく、「^{なんてんじく}南天竺に^{りゅうじゆだいじよ}竜樹大士世にいでて、こと

ごとくよく有無の見を摧破し、)

《お釈迦様はインドの楞伽山という山で、多くの人々に告げられました。「南インドに竜樹菩薩が世に現れて、有無の邪見をことごとく打ち破り、》

お釈迦さまは、楞伽山で『楞伽経』という経典を説かれた時、「南インドに竜樹菩薩という人が現れて、有無の邪見を打ち破る」と予言されました。

楞伽山は、セイロン島、現在のスリランカにある山とされています。
この山でお釈迦さまが説かれた教えが『楞伽経』で、ここに竜樹菩薩のことが予言されています。

「有無の邪見」の「有」の見とは、永遠不変の実体が「ある」と執着する考えのことをいいます。この世は永遠に続くもので不滅であるとする見解であり、死後も変わらぬ魂が存在するという考え方で、これを「常見」といいます。

「無」の見とは、反対に、すべてのものは「ない」、虚無であり断滅するものであると執着する考えです。死んだら何もなくなるという教えです。これを「断見」といいます。

竜樹菩薩は、有に偏ったり無に偏ったりすることを偏見だとして、「中道」に帰することを説かれました。つまり「有無を言わせない」教えでした。

〈和讃〉の7頁目上段1行目に「有無をはなるとのべたもう」とありますが、これもここから来ています。

「うやむや」という言葉がありますが、これは「有耶？無耶？」と問うたところからきており、「有るか無いかははっきりしないこと」→「いいかげんなこと」「曖昧なこと」の意味になりました。

ですから、有無に執着する邪見を打ち破って、縁起説（すべてのものは因と縁とによって生じたり滅したりするということ）を深化・発展させ、大乘仏教の根本的な「空」の思想を打ち立てました。

「空」とは、あらゆる事や物は因縁によって生じたもので、独立した不変の固定的実体がないということ、縁起しているということです。

すべての現象は、それぞれの因果関係の上に成り立っているということです。
これを「縁起・無自性・空」ともいいます。

木箱があったとして、それに物を入れれば収納の物入れになるし、腰掛ければ椅子になるし、その上で勉強したり飲食すれば机となるし、上に立って高いところにある物を取ろうとすれば踏み台となります。でもそれは、木箱にすぎないのです。

角砂糖は通常の方がコーヒーや紅茶に入ればおいしい甘味料となりますが、糖尿病の人やダイエット中の人などには害悪となりかねないし、赤ちゃんの口に無理やり押し込んでも害となります。

「空」とは、単なる「無」ではなく、永遠で普遍的で固定的な実体や我というものはないと考えることであり、有無等の対立を否定することです。

竜樹菩薩は、この「空」の思想を理論的に解明し、大乘仏教最大の思想家として、そして中観派の始祖として仰がれました。

「^{せんぜだいじょうむじょうほう}宣説大乗無上法 ^{しょうかんぎじしやうあんらく}証 歡喜地生安樂 ^{けんじなんぎやうろくろく}顯示難行陸路苦 ^{しんぎやう いぎやうしどうらく}信樂易行水道樂」

「^{だいじょうむじょう ほう せんぜつ}大乗無上の法を宣説し、^{かんぎじ}歡喜地を証して^{あんらく}安樂に^{しやう}生ぜん」と。^{なんぎやう りくろ}難行の陸路の^{けんじ}苦しきことを^{けんじ}顯示し、^{いぎやう すいどう}易行の水道の^{しんぎやう}楽しきことを信樂せしむ。」

《大乘のこの上もない教え（法）を説きのべ、^{かんぎじ くらい}歡喜地の位に至って、^{いた}阿弥陀仏の淨土（安樂）に往生するでしょう」と仰せになりました。^{りゅうじゆほさつ なんぎやうどう}竜樹菩薩は、難行道は^{りくろ}苦しい陸路のようであると示し、^{いぎやうどう}易行道は^{ふなたび}楽しい船旅のようであると^{すす}お勧めになりました。》

この「大乘無上の法」とは、南無阿弥陀仏の名号の法、他力念仏の教えのことです。

「歡喜地」とは、菩薩が悟りに至るまでの五十二位の階位のうち四十一位のこと、十地のうちの初地ともいいます。菩薩がこの位に至れば真理を悟るとされ、再び後戻りすることなく、必ず成仏することに定まり、歡喜が生じるので歡喜地ともいいます。これを「不退轉地」とも「不退の位」ともいいます。（『瓔珞本業經』『十地經』などによる）

親鸞聖人は、これを真實信心の念仏者が現生、この世で得る「^{りやく}正定聚」「必定」の利益とみられました。

親鸞聖人が竜樹菩薩を真宗の七高僧の第一番目に選ばれたのは、竜樹菩薩が仏教を「難行道」と「易行道」の二つに分けられたという功績によります。

これは、竜樹菩薩が書かれた『十住毘婆沙論』の「易行品」に記されています。

難行道とは、千日回峰行や滝行、火の上を歩いたりする、厳しい修行のことです。易行道とは、信心をいただいでお念仏を称えることによって成仏する易しい行のことです。易しい行ではありますが、難信、信じることは難しいといわれます。疑い・疑も、煩惱のひとつとされます。

仏法には、八万四千の法門と言われるように、はかり知れない多くの教えがあります。たとえば、世間の道路に難しい道と易しい道とがあって、険しい陸路を歩いて行くのは苦しいが、水路を船に乗って渡るのは楽しいようなものです。

私は近年、熊野古道の写真を撮っています。熊野古道の中には険しい山道に行く大変なルートも多いですが、熊野本宮大社から熊野速玉大社へ向けて熊野川を舟で下る、楽ちんな「川の熊野古道」もあり、多くの巡礼者が利用したようです。

菩薩の道もまたそのようであり、いろいろな厳しい難行苦行を積んで修行する者もあれば、信心に基づいた称名（信方便の易行）をもって速やかに不退転の位に至るものもあるということです。

「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」

〈「みだぶつ ほんがん おくねん 弥陀仏の本願を憶念すれば、じねん そく 自然に即のとき、ひつじょう 必定にいます。ただ、よく常に如来の号を称し

て、だいひぐぜい おん ほう 大悲弘誓の恩を報ずべし」といえり。〉

《「阿弥陀仏の本願を信じれば（憶念）、信心をいただくと同時にのおのずから（自然）ただちに

しょうじょうじゅ ぶつ 正定聚（必ず仏になることが定まった位＝必定）に入ります。ただよく常に阿弥陀仏のみょうごう 名号

をとな 称えて、すべての人々を救ってくださる大悲のおん むく 恩に報いなさい」と述べられました。》

「憶念」とは、心の中に常に思って忘れないことですが、ここでは心に深く信じることです。「自然」とは、おのずからしからしむ、という意味で、人のはからいではなく、本願力によることで、これは他力のはたらきを表しています。

「すべての人を救い取る」という阿弥陀如来の本願を信じるのが、この世において、浄土に往生することが定まった身（正定聚）にさせていただく道であるということです。

だからこそ、常によく阿弥陀仏の名号を称えて、広大な慈悲の本願のご恩に報謝するべきである、と竜樹菩薩はおおせられたのです。

阿弥陀如来とは、永遠のいのちを持ち、無限の光を放つ仏様です。

阿弥陀如来の本願とは、人間の思いやはからいを越えた、不思議なおはたらきのことです。

私たちが生かされている、大元の存在と言っていいでしょう。

そして私たちに、なんとか幸せになってほしいと願われているのです。

その阿弥陀如来の本願とは、すべての人に救われてほしいという如来の願い、誓いのことです。

念仏という易行によって仏様と同じ尊い位になることに必ず定めていただけるのは、阿弥陀如来の本願を信ずるからであり、だからいつも如来の名前をお称えして、そのご恩に感謝しなければならぬと竜樹菩薩は言われました。

以上で今日のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。